

教育スタッフ PLAZA

新連載

研修の理解を深める テスト フォーミュレーション



第①回

作問の流儀① ～思考を深める設問づくり～

市進ホールディングス
コンサルティング事業研究所 所長

細谷幸裕



ほそや ゆきひろ

1996年、株式会社市進入社。現場を経て、2005年より同社教育本部教務統括室にて講師養成に携わる。2008年からは全国の教育委員会・私学での教員研修の講師を務めるようになり、現在は企業・官公庁を中心に、「社内講師養成」、「OJTトレーナーのコーチング」、「説明力強化」などの研修・コンサルティングを行っている。

テストフォーミュレーションとは

テストというと、あらかじめ設問（問い合わせ）が設定されており、受講者がそれに解答し、出題者が理解度を測定するというのが一般的な考え方です。一方で、テストフォーミュレーションとは、テストを講師側（教える側）がつくるのではなく、講義を受けた受講者側（学習者側）がつくることで、その問い合わせの精度や切り口などを判断材料に、学習内容の理解度把握と探究を試みるもので、学習した内容を学習者自身が設問（テスト）にすることで、自分の問い合わせを他者のものと比較して客観視したり、その問い合わせについてさらに思考を深める効果をねらいます。

テストフォーミュレーションという言葉は私が提唱しているのですが、ここには学校教育のなかで推進されている「探究学習」の考え方を取り入れています。探究学習とは、文字どおり、テーマに対して個人や他人との協働のなかで探究しながら解決を図っていく教育手法のことですが、テーマとなる課題も生徒自身で問い合わせを立てて課題設定する点が特徴です。

これまでの教育手法の多くは、学校教育、社会人教育問わず、教える側が問い合わせを立て、教わる側は立てられた問い合わせに対して正解または最適解を探しにいくというものが一般的でした。しかし、変化の激しい時代においては、用意された問題を解決する力と同時に、自らが問題を発見する力、その前提となる「問い合わせを立てられる力」が求められるようになってきています。

テストフォーミュレーションにおいては、この問い合わせを立てる工程が非常に重要です。例えば、同じ素材で同じ講師から学んでも、学習者が立て問い合わせは各人のフィルターを通した情報でつくられます。つまり、個々の学習の仕方には、良くも悪くもバイアス（偏り）がかかっているということです。

テストフォーミュレーションでは、この学びに対する認知バイアスの特性を活かして、受講者が立てた問い合わせを他者と共有しながら、自分にはなかった視点の再認識や他者の問い合わせから喚起される探究心などを活かし、深い学びに導いていきます。

問い合わせ見える理解度

学習した内容に対して問い合わせを立てるとき、皆さんならどんなプロセスで考えるでしょうか。このプロセスに正解はありませんが、理解度の浅い学習者が立てる問い合わせには、「抽象的」で「直接的」といった傾向があります。例えば、「コンプライアンス」をテーマにした講義のあとに問い合わせを立ててもう場合に、理解の浅い学習者は、「コンプライアンスとはどんな意味ですか?」「コンプライアンスはどういうものですか?」と、直接的に聞く傾向があります。

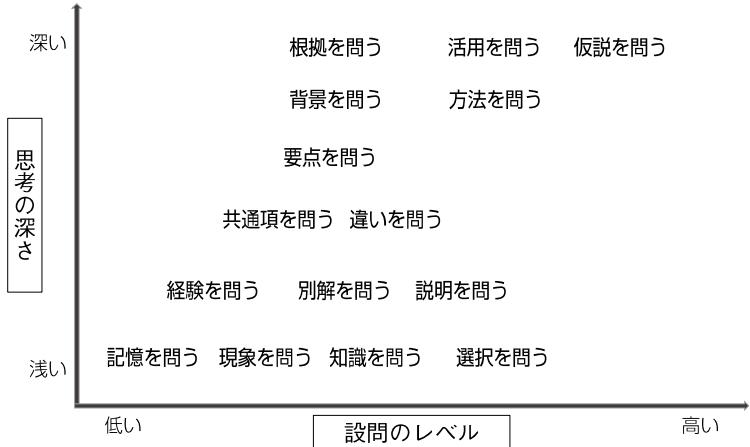
このような問い合わせの多くは、深く考えるきっかけになりにくく、想定される解答も単純な知識や漠然としたものなど、表層的になります。表層的な答えになるということは、表層的な思考のもとで問い合わせが立てられていることになるため、必然と浅い思考であることが透けてみえてしまいます(図表)。

一方で、「なぜこのケースは発生したと考えられますか?」「異なる2つの事例の共通点は何ですか?」といった、テーマの本質に近づけたり、分析的な視点を取り入れた問い合わせは、問われた側も思わず「なぜだろう?」「何だろう?」と考えてしまいます。こういった問い合わせは、学習者が自らの学習によって得た洞察から出てくる場合が多いため、学習者自身もその問い合わせに対して何らかの解答をつけようと、さらに深く考えるようになります。このように、研修や講義などの学習後に問い合わせ立てて可視化することで、その学習者の学びの視点や学習の理解度までをみることができます。

問い合わせから生まれる探究心

思わず「なぜだろう?」「何だろう?」と考えてしまう洞察に基づいた問い合わせには、その問い合わせ自体に深みがあります。そのため、作成者自身も「もっと深く考えたい」というスイッチが自然と入りやすくなります。というのも、作成された問い合わせは、作成した本人が無意識的に関心がある事柄のため、さらに資料を読み直したり、別の文献にあたってみたり、他者と意見交換し

図表 思考の深さと設問レベルの関係



たりと、探究的な行動に入りやすくなるからです。

この、自らが問い合わせを立て、自らがさらに深めようという行動は、無意識に理解していることを「問い合わせの可視化」によってあらためて意識化することであり、これによりさらに深い学びに向かう循環をつくり出します。

一方で、企業教育のなかでは、この問い合わせづくりはあまり活用場面がない、研修に追加するのは難しいという指摘もあります。しかし、テストフォーミュレーションのために何か特別な場面を用意して、全員で何かを一斉に実施する必要はありません。むしろ、eラーニングのようなインプット中心の学習後に個々の学びを問い合わせにしてもらうだけでも、学んだことを整理する効果があります。また、集合研修の最後に行う振り返りの場面でこの「問い合わせづくり」を活用することで、受講者の学びに対する探究心も芽生えてくるでしょう。

これまで述べてきたように、問い合わせにはつくり手の視点と洞察が隠されており、それがテストフォーミュレーションによって可視化されます。そして、それらが他者と共有されることで、双方に新たな気づきと学びが醸成されていくのも、テストフォーミュレーションの魅力であり、個々の学びを個々の視点で再整理し、他者との問い合わせを共有しながら、さらに深い学びにつなげる可能性を秘めていると感じています。

*

次回は、実際に問い合わせを立てる際の留意点を良い例、悪い例などをあげながらみていきます。